『働くことと愛すること』

「正常な人間として、よくなしえなければならぬものは何だと思うか」という問いに、「愛することと働くこと」と答えたのは精神科医のフロイトという人です。
精神分析という心理療法を創始したことで世界的に有名な人ですね。

シンプルですが噛み締めるほどになかなか味わいがあります。
すでに色々な人たちが取り上げて、その意味の深さを解釈されています。
「人間が人を愛する権利や能力を失うほどに仕事の生産性ばかりに傾けてはならない」ということを言った人もいます。
または、『こころの問題』は、愛情生活や労働生活の領域における問題として現れやすいと仰る人もいます。
この二つがバランスよく満たされている人が幸せだと言う人もいます。

私も日々考えています。
たとえばですが・・・
30 歳を過ぎたお子さんが、仕事が続かずに家でふさぎ込んだり、時に暴れたりしているというご相談でいらした 60 代の親御さんのお話しをうかがっているうちに、親御さんご自身が十分に親からの愛情を得られていなかったというお話しになり、その空虚感を埋めるために仕事に打ち込んで来られたこと、仕事に打ち込むあまり、お子さんに手をかけてあげられていなかったのではないかと悔やまれるなどということが時々あります。

または・・・
自分のところに来た部下が長続きせずに辞めてしまう、会社では自分に問題があるんじゃないかと言われ始めている。次に来た部下にはどのように接したらよいか？
というご相談から、誰よりも部下に期待をしてしまうことがわかり、その結果つい厳しくしてしまうこと、そうした厳しさが愛情だと思っていたこと、その愛情が全く伝わっていないことに本当は深く傷ついていたことに気がつかれて、大粒の涙をこぼされるというようなこともあります。

「愛すること」と「働くこと」とを並べて語ることは強引過ぎるのではないかと仰る方もいらっしゃるかと思います。
私はこれを『認めること』と『認めてもらうこと』なのではないかと考えています。
そう考えたとき、このコラムのタイトルでは、並べ方を逆にしました。

働くことと愛すること・・・です。

先ほど例に挙げた 60 代の親御さんは、親から愛されなかったという思いが、人から認めてもらえていないという思いになり、そんな不安をかき消すように懸命に働いて、多くの人から認めてもらおうとしました。
だから働くことができていないお子さんをどうしても許すことができませんでした。

親御さんは、お子さんが《認めてもらうこと＝愛されること》を拒んでいるように感じてしまい、「どのように愛して良いかわからない」と悩まれていたのです。

やがて、時間と共にそんなお子さんのことを『認めてあげる』ことができました。仕事が続かないということを過剰に責めず、それでも自分にできることを探そうとしているお子さんを励まし続けることで、ご自分がお子さんを愛しているのだということを自覚していかれました。
お子さんの方は、いくつかの仕事を経験したのちに、ご自分に「合っている」という仕事に就かれました。

また、別の例の厳し過ぎる上司の方も、ご自分の傷つきをご自身で認められてからは部下から慕われる上司になられました。
人に期待されたくて、そのために自分自身に厳しい目標を設定し、それを乗り越えることで自信をつけて来られた方でした。
しかし、その自信にもどこか不安定さを感じていました。
この方もやはり、《愛されて＝認められて》育てられたかったという思いがありましたが、自分が自分を育ててきたやり方で誰かを育てることで、その不安を払拭してしまいたかったのだそうです。

沢山の子どもたちとお話しをしていて感じるのですが、多くの子どもは親の役に立とうとして頑張っています。そして、親から認めてもらえると、それがどんなに些細なことであっても本当にうれしそうな顔をします。

役に立ちたくて、ほめられたくて、認めてほしくて頑張ることが、大人になってからも『働くこと』をこころの奥で支えているように思います。

そして、そんな人たちの頑張りを認めることが『愛すること』につながっているのではないでしょうか。

簡単に認めることができる頑張りには、そんなに『愛すること』のエネルギーはいりません。ですが、認めてあげづらい頑張りにこそ『愛すること』が大きく必要なのだと感じています。だからなかなか報われず『働くこと』をやりすぎている人を私は愛します。
そして、もし、その人が何かに気がつかれたなら、次に誰かを『愛すること』、頑張ってほしいと願っています。

だから、私にとっては、まず、働くことで、次に、愛することなのです。

発　　行
本山社会保険労務士事務所
東京都杉並区成田東５－３９－１１－４０１
発行年月日　平成２７年７月
＊筆者は現在クリニックでカウンセラーをされています。仕事の関係上氏名の公表は控えさせていただきます。